

に痘科同盟会があったことがうかがえる。伯寿は、痘瘡に対し、隔離と治痘に対処しようとしたが、今日伯寿の治痘術は伝承されていない。伯寿は、池田の治痘術と異なると述べていることからこの点でひとつの対立点があったと考えることができる。また池田流の治痘術は、痘瘡が発症した後のことであり、伯寿の問く隔離論は社会的に影響が大きいものであり、池田側は隔離論をとっていないことも対立点として挙げられる。断毒論版木押収事件は、医学界の流派間の抗争と考えられ、まもなく版木が返還されたことからみても、幕府による橋本伯寿断圧とは異なる性格のものであると考えることができる。

25) 平安貴族は本当にお歯黒を付けていたのか？

Did the noblemen of the Heian Period really wear 'Ohaguro' on the teeth?

京都市開業 東 智

Satoshi Azuma, Kyoto City

平安時代を舞台にした時代劇を見ていると、時折、白粉にお歯黒、引眉ひきまゆという化粧をした男性貴族が現れる。こうした演出を行う際の時代考証に用いられる最も古い史料が、恵命院宣守が1420年に著した『海人藻芥』で、「(鳥羽院)の御代以前は、男が眉の毛を抜き、鬢をはさみ、金かねを付ける事一切之無し」と記している(注：金は鉄繫付け、お歯黒のこと)。但し、出典は不明である。1784年頃に伊勢貞丈が執筆した『貞丈雑記』には、源有仁がお歯黒を始めたと記している。しかし、引用する『今鏡』は有仁が強装束を始めるなど衣紋道を極めたと記しているが、お歯黒や引眉については全く触れていない。なお、鳥羽上皇の生年は1103年、没年は1156年であり、源有仁は1103年と1147年である。

『貞丈雑記』は、『平家物語』や『源平盛衰記』に平忠度がお歯黒を付けていたとの記述が続く。1184年の一ノ谷の戦いの中で、忠度や敦盛が討ち死にしていく場面は、琵琶法師の情感深い語りもあって、聞く者の涙を誘ったことであろう。それとともに、戦場においても薄化粧にお歯黒を付け

ているという貴族化・軟弱化が平氏の衰退を招き、質実剛健な源氏に打ち滅ぼされたという演出効果も上げている。ところで『平家物語』や『源平盛衰記』には虚構や誇張が多く、史料としての取扱いには十分な注意が必要である。『平家物語』は1221年に起こった承久の乱以前に成立していたとの説があるが定かではなく、成立当初の物語がどのようなものであったかでさえ不明である。仮に『平家物語』の成立時期を承久の乱の前後だとしても、一ノ谷の戦いから40年近くが経過している。平氏一門の武将たちがお歯黒をしていたことにも疑問を挟んでよいのではないだろうか。

『とりかへばや』という12世紀後半に著された物語がある。男性として生きてきた妹君が女性に戻る場面で「(髪は)尼のほどにふさふさとかゝりたり。眉抜き、かねつけなど女びさせたれば……」とあるように、お歯黒、引眉は女性が行う化粧と記している。時代設定が成立時期に近いとすると、男性貴族がお歯黒をするようになったのは、早くても12世紀末のことになる。

男性貴族のお歯黒について記した最も古い確実な記録は、藤原定家『明月記』の1226年7月29日の日記である。「成実、今日直衣始。女院に参ず(直衣の色甚だ濃し。鉄かねを付け、眉を作る)。」鳥羽上皇の崩御から70年が経過している。すでに誰もが慣れたお歯黒を記すということに違和感を感じる。12世紀前半に男性貴族がお歯黒を始めたという従来の通説を覆すだけの資料は見つかっていない。しかし、承久の乱の後、政権が鎌倉幕府に掌握され、貴族社会の様相が変化したことに伴い、お歯黒が男性貴族に浸透したという推論を提起したい。

26) 華岡青洲が考案した外科結び

Seisyu Hanaoka devises the way of connecting called surgery knot.

袖ヶ浦市 長谷川 弥

Hisashi Hasegawa, Sodegaura city

華岡青洲が考案した外科結び

1846年モートンによるエーテルガス麻酔成功

に先駆けること42年以前の、文化元年10月13日(1804年11月14日)華岡青洲は通仙散による全身麻酔で乳癌の摘出手術に成功した。華岡青洲の業績はこれだけではなく、乳癌の摘出手術を成功させる以前に縫合に用いる外科結びを考案していたことである。この経緯は有吉佐和子著「華岡青洲の妻」に詳しく述べられている。

臨床実験で通仙散を服用し三日二晩の昏睡から覚醒した妻加恵に、青洲が尋ねるところから、その一節を引用すると、

「ところで加恵、お前の紐の結び方は誰に習うたんよ」

青洲は帳面に書き込みを終ると寛いだのか話題を変えた。その言葉で加恵は夫が加恵の脚を縛った紐をみたのを知り、予期はしていたが仄かに恥じらいを覚えた。

「無理をして答えいでもええで、頭に響くといかんよってにの」「いえ、大丈夫ですよし」小さな声で加恵は云った。「お祖母さんから武家の女のたしなみやというて習うたものでございますよし」「なんという結び方よ」

「さあ、それは聞きませんなんだよし。ただ動けばいよいよ締まることはあっても決して解けることはないと教わりましたよし」

「うむ。やってみようかい」(後略)

とここで青洲は母親の於継から腰紐を借りて自分の膝頭を幾度もほどいては縛り、縛っては解き試してみて、この結び方は、カスパル流にない優れた結び方であると感じた。この結び方が大いに気に入った青洲は麻の手術着の胸に二ヶ所、両袖、背中に一ヶ所、それに袴の前立てに二ヶ所縫い付けて家紋の代わりとしていた。また羽織の五つ紋の代わりにも使用していた。羽織の紐も通常の男物の紐ではなく、青洲が考案した結びの留め結びのところを蝶結びとして使っていたことが肖像画を見るとよくわかる。

この結び目は手術をする際に襷を通して袂をたくし上げるのに利用していたのである。

外科結びは現代の名称であり、この結び方を青洲は何と呼んでいたかが疑問である。和歌山県紀の川市西の山にある「青洲の里」記念館で出している「華岡青洲先生 その業績とひととなり」という小冊子の中に、青洲考案の皮膚縫合の種々という帳面の図が掲載されており、この中に記述が

あるものと考え紀の川市教育委員会、華岡青洲顕彰会所蔵のこの資料の調査に行ったがすぐには閲覧不可能であり、判明しなかった。後日調査の上回答すると確約は得てきた。

華岡青洲は一切本を書いていないので、門弟は書き写した「青洲先生医談」を克明に調べてみても、この結びに関する記載はなく不明であった。

華岡青洲門下の高弟であった本間玄調著「瘍科秘録」巻四之上にただ一ヶ所「膝結」という記述を見出すことができたが図は描かれていない。青洲が膝結という呼び方をしていたかは断言できないが、妻加恵が膝を結んだことから考えついたのであるから、おそらく青洲はこの膝結びと呼んでいたものと推察するものである。

なお、近代西洋医学でいつごろから手術の縫合に外科結びと呼ばれ、採用されるようになったのかは目下調査中であり、今後の研究課題としたい。

27) 疱瘡絵イメージが明治から昭和初期の売薬広告に与えた影響について

“Hôssôe” has given influence to the medical advertisement from Meiji to Syowa era.

宗像市 竹原 直道

Tadamichi Takehara, *Munakata City*

江戸時代に描かれた疱瘡除けの呪物、疱瘡絵(赤絵)のモチーフが、明治から昭和初期の売薬広告に影響を与えたのではないか、という仮説について検討した。その結果、江戸期疱瘡絵の定番キャラクターである達磨、春駒、兎、熊、鯛、鍾馗、金太郎、桃太郎、弓矢、などが明治から昭和初期の薬袋、売薬引札、売薬版画のモチーフとして用いられていた。しかしこれらはたまたま子どもが喜ぶ絵本のキャラクターに過ぎないのであって、疱瘡絵とはなんの関係もないかも知れない。似たキャラクターがあるからといって関連があるとはいえないのではないかと、この疑問が生ずる。実際の疱瘡絵では、疱瘡除けキャラクターが単独で描かれることはむしろ少ない。そこで一つの売薬広告のなかに、疱瘡除けキャラクターが複数描かれているかどうかを見てみた。すると熊と緋鯉(赤)、熊と金太郎、達磨と兎、鍾馗と逃げる疫鬼、